

教え

律法学者

イエスさまの時代の人々にとって、律法学者は会堂の教師であり、律法の戒めを解釈する役割を果たして

ていました。イスラエルの歴史の中で、ある期間イスラエルの民の中心的存在であったエルサレムの神殿がこわされ、人々がバビロニアへ連れていかれましたので、律法のいましめが生活の基盤となっていきました。しかし、人々は文字も読めず、律法のいましめも

理解できませんでしたので、人々に律法を読んで聞かせ、その意味をわかりやすく説明する律法学者が必要となりました。

教えと行ない

イエスさまと律法学者との違いはどこにあるのでしょうか。律法学者はユダヤ教の言い伝えに従い、律法を解釈していました。イエスさまは、言い伝えにとらわれないで、一人一人の人間を大切にするためにはどうしたらよいかを教え、教えるだけでなく自ら行ないによって人々に模範を示しました。

キリスト教の歴史においても、教義が作られ、そ

れが固定した教えとして守られてきました。しかし、
それでは現実の生活とはかけ離れた信仰となってい
きました。第二バチカン公会議は、こうした現実を
素直に認め、教会が人間の現実に答えられる信仰を
持つことができるように探し始めました。

イエスさまの時代の律法学者のような態度を持た
ないよう反省する必要があるのです。言い伝えがまち
がっていたというのではなく、言い伝えにこだわらな
まり、人間の現実に対応した行ないができないことが
問題なのです。

どのような行ないが大切かを考えて、次の空白に書
いて下さい。

